
巻 頭 言

健康、試練、ホームラン

副学長（評価担当）
評価センター長 神 谷 修

秋田大学は、第2期教育研究評価に関わるヒアリングを無事終了して、一同ほっとしたところです。平成28年度は、第2期中期目標期間を終了して第3期の始まる年度であったため多くの報告書の提出と2回のヒアリングを受け大忙しでした。ご協力を頂きました関係者の皆様には、深く感謝申し上げます。

秋田大学の組織体制は、生きている人間のようなもので、評価は健康診断だと思っています。健康な体は成長して、特色ある仕事をして社会に貢献します。役員は頭となり、4つの研究科は両手両足となり、目標に向かって前進します。目標設定には構成員と議論を尽くし、ひとたび目標を立てたら達成を目指して、それぞれの立場で獅子奮迅です。

大学における自己評価は、体の感覚器官であり、自らの体が健康で目標に向かって歩いているかを検出して、データを集約して必要なところへ報告する役割といえるでしょう。

秋田大学という人間が受ける主な外部評価は3つあります。初めに、大学改革支援・学位授与機構による機関別認証評価は、学校教育法に基づいた大学の健全性の診断、人であれば健康診断ですから合格するのが前提です。次に、文部科学省による法人評価は、人に例えるなら、自らの目標に向かって真面目に働いているかを確認するようなものです。これも健全な業務運営がなされていることが基本です。従って、認証評価と法人評価の2つは、秋田大学という人間が、健康でしかも目標に向かって実直に働いていることの外部評価であり、習慣的に自己評価していれば、ストレスは避けられます。

私が重要視するのは、3つめの大学改革支援・学位授与機構による教育研究評価です。ここでは大学の特色と強みが評価されます。教育の質の向上と研究の独自性が問われます。教育研究評価は、大学ごとの絶対評価ではありますが、私は実質的には大学間の厳しい競争が行われているととらえます。つまり、秋田大学という人間が、自己の強みをアピールすることにより、他大学に競い勝ち、その結果として受験生、進路指導の先生、会社の社長そして海外の大学から秋田大学を一番に選んでもらうようにする必要があります。そこで、最近重要視されているIR（Institutional Research：機関調査）の機能を充実することが早道と思います。IRでは、大学の経営改善や教育の質向上のために、学内のデータを収集・分析します。この分析により、目標に照らし合わせた機関の「弱み」と「強み」が明らかになります。この二つは、意志決定者に報告され、弱みは改善され、強みは伸長されます。入学した学生は、個性豊かに成長し、社会へ巣立ってゆくことになります。その結果、「秋田大学の入り口側では、受験倍率が増え、出口側では求人数が増える」ことを目標にします。大学は試練の時期を向かえたと言えます。

IRの推進担当は、よほどの愛校心が無ければ勤まらないと思います。何しろ逆風の中で、わが身の強みを見出し、弱点は克服し、データを整えて正しく売り込んでいかなければなりません。お客様は「今は秋田大学を必要としません。間に合っております」などと言うかもしれません。それに対して私たちは、説得性あるデータをそろえて「しかしながらお客様、秋田大学はデータによると、この点が優れております。」と粘り強く営業活動をしていかなければなりません。IRは誰か学外の専門家をお願いするのではなく、私たち構成員が愛してやまない所属機関の活路を、死に物狂いで見つけるという作業に他ならないと思います。愛校心と郷土愛に満ちた構成員が進めるIR評価、これが本当の「愛有る評価」と言うことになります。これは「親父ギャグ」を超えて、核心を突いていると思います。私の愛は熱く燃えているのですが、やった事が無いので、IRの早急な訓練が必要となることは間違いないと思います。

地域に特色ある課題を見つけ出し、学生と現場を歩み、学生と考え、学生とともに解決してゆく研究教育をしたい。良くも悪しくも秋田県は課題の宝庫だ。9回裏に差し掛かった秋田県の人口減少問題、このままでは負けです。学生とともに地域を歩み、スマートな解決策を見つけて、逆転満塁ホームランとしたい。さあ、ピンチヒッターは君だ。